ポスターシンポジウム

大学・高等学校の地域連携事例報告

田原　陽介（青山学院大学）
藤森　裕基（日本大学）
鴨澤　小織（日本大学）
阿部　滉（聖パウロ学園高等学校）
コーディネーター　藤平　敦（日本大学）

1. ポスターシンポジウムの全体の流れ（藤平）

皆さん, おはようございます。ご紹介いただきました, 文理学部の藤平です。ポスターシンポジウムのコーディネーターを務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いします。進め方ですが，この後 4 つの団体から，一人 10 分ずつ発表していただきます。その後，全体協議が 20 分となります。時間が区切られていますので，個々の発表の質疑等につきましては，全体協議終了後のポスターセッションの際に細かく聞いていただきますようお願いします。20 分の全体協議では，落合会長からお話がありました通り，本大会の大学地域連携学とは何かということを探っていきたいと思います。

2. 青山学院大学コミュニティ人間科学部における実践（田原）

皆さん, おはようございます。青山学院大学の田原です。それでは, 大学における地域連携の実践事例ということで, 青山学院大学コミュニティ人間科学部の事例をお話しさせていただきます。

青山学院大学コミュニティ人間科学部は 2019 年に相模原キャンパスに設置されていました。学部を構想する段階では，地域社会における様々な活動に関する学習を行う社会教育系の学部ということでスタートしました。学部のキャッチフレーズは「地域を活かし，地域で活きる，実践知」ということで，とにかく地域を活用する，もしくは卒業した後に地域で活きるような人材を育成するということで始まっています。

教育上の目的を 3 つ書かせていただきました。どこにも地域社会があります。地域社会を理解する，諸問題を解決する，もしくは貢献できるということです。定員は 240 名です。プログラムが 5 つあるのですが，3 年生の段階でその中から選ぶことになります。コースではなく履修モデルなので，プログラムと呼んでいます。それを貫くのが，演習科目と言いまして，必修になります。他の大学さんも大体同じような演習科目があると思いますが，ゼミ活動が 1 年生から 4 年生まで入って，基礎演習から始まって専門演習，これがいわゆる専門ゼミです。4 年生になると，卒業研究が始まります。

2 年生・3 年生の段階で地域実習という科目があります。これは地域で体験活動を行っていく役割を持っています。そういう実習系の科目は教育実習や看護実習など資格に絡んで必修という形はよくあると思うのですが，割と選択型が多いです。しかし，本学部の場合は資格に関係なく卒業必修ということになります。そのため，240 名が 3 年生の時に必ず現地地域に行って地域活動，まちづくり・まちおこし等を体験するということになります。それが 2 年生・3 年生に入ってきます。

当然，お出かけばかりしていては学習も進みませんので，1 年生のうちは学部基礎科目があります。それを基に，2 年生，3 年生で自らの目標・関心で科目を選択し，学びの幅を広げ，深掘りするような地域実習科目が存在しています。

田原陽介氏

この地域実習科目には 1 と 2 があります。地域実習 1 は，どちらかというと見に行くための準備になります。1 クラス 24 名の 10 クラスで，1 年生の後期の段階で，地域

実習2でどこに行くかを決定し，その準備をします。これは通年隔週で15回，講義形式と演習方式でテーマがあります。地域実習2は，先ほどから申しています通り，現地に行って体験活動をします。15回分の授業で1単位，期間は集中型です。クラスは，8名を1実習先にカウントさせていただいて，30クラスです。

地域実習1は準備ですので，事前学習として，地域の基礎情報や教育・文化について調査します。これは卒論につながったりしますので，重宝しています。文献調査をして実習を終えた後は，先輩や交流目的が近い実習先のクラスと交流を行います。

地域実習2になりますと，実際に現場に行きます。地域連携事例については，30グループ，30カ所ありますので一つ一つ説明できないのですが，北は北海道，南は沖縄・石垣まで，それぞれの地域に行って体験活動を行います。

基本は，学科教員が実習先を確保します。そのため，学部創設の時には実習先の確保がかなり大変でした。たまに地域から売り込みもありました。学生は，泊まりで行く場合は5泊程度になりますので，実習先によって，ある程度の補助があります。実習先の確保については，地域実習運営委員会が管理しています。選定基準は，どこでもいいということではなく，行政との連携をしているところや，教育・福祉など学科のプログラムと関係している組織に行くということになります。今のところ，実習先の入れ替わりは少ないです。

実習先の分類は，子ども活動・イベント・地域文化財・諸々あります。実際に見ていただいたほうがいいかと思います。私が担当しているのは，「えひめこどもチャレンジ支援機構」と言いまして，無人島体験事業というものです。テレビ撮影でよく使っていた場所である，愛媛県の宇和島市の沖合，御五神島というところで，子どもたちを連れて無人島体験事業を行います。無人島に6泊7日で私も一緒に寝泊まりします。トイレはなしで，自分たちで掘ります。そしてお風呂なし，電気なしというところで，6泊7日します。学生たちは初日の夜に大変さからテンションが下がるのですが，自分たちで食事の準備をしなければいけないので，魚を釣って食料の調達をしたりしています。また，子どもたちの保護者へSNSで発信もしております。

最後に，課題の3つです。どこの実習先でもそうなのですが，どうしても学生のミスマッチは起こってしまいます。確保・入れ替えも，教員がかなり苦慮するところですが，一番は「リアル」体験の難しさです。地域連携と言いましても，学生の体験そのものに対して「お客さま」や「若者歓迎」のムードがどうしてもありますので，ここでリアルな地域の体験をするというのは，なかなか授業の中でも苦労しているところです。

このような取り組みを青山学院大学コミュニティ人間科学部ではさせていただいています。ありがとうございました。

3．日本大学文理学部化学科おける実践（藤森）

皆さん，おはようございます。日本大学文理学部の藤森です。私自身は化学科ですので，今日は理系の教員として実践していることを紹介させていただきます。短い時間ですが，最初に自己紹介をさせていただき，その後，日本大学文理学部として実施している地域連携を，続いて今日のメインテーマである科学実験・文化フェアの話，そして最後に松沢小学校や下高井戸商店街を通じての地域との関わりについてお話しさせていただきます。

最初に自己紹介です。長野県の諏訪市で生まれました。大学はここ，日本大学文理学部化学科で，入学するときに東京に出てきました。このキャンパスのすぐそばの緑丘中学校の隣に下宿していまして，4年間，お世話になりました。大学院は目黒区の東京工業大学に進学し，パリや愛知県岡崎市で博士研究員をした後，30歳で日本大学文理学部化学科に戻ってきました。一時期杉並区に住んでいましたが，現在は世田谷区に住んでいます。世田谷の大学で，地元も世田谷区ということで，ここでいろいろと活動をしています。

藤森裕基氏

私は，2000年から断続的に，広報委員会に所属していました。2016年から2021年には名前が変わった企画広報委員会で委員長として，広報活動に携わらせていただきました。今日お話しする科学実験フェア等は，元々広報委員会の企画の一つとして始まりました。

では早速，文理学部の地域連携についてです。文理学部では2017年度から地域連携推進委員会を設置しまし

た。青山先生が恐らく初代の委員長だったと思います。その後，地方包括協定連絡部会等も設置して，学部として地域連携を推進しています。地域連携としてどのような活動をしているかというと，大きく分けて 4 つです。地域連携，教育連携，インターシップ連携，その他です。
地域連携として細かい話は，今日のポスターにスペースの許す限り書かせていただきましたので，是非，そちらをご覧ください。世田谷区や三郷市，那珂市，中川町とは包括協定を結び，いろいろな活動をしています。

教育連携に関しましては，もちろん日本大学附属高校とは当然高大連携をしていますが，それ以外にも，お隣の松原高校や群馬県の明和県央高校等と教育連携をさせていただいています。学生のインターンシップについて，今はもう企業のインターンシップが真っ盛りですが，インターシップが始まった当時はどこで学生にやってもらおうか，どこが受け入れてくれるのかというのが問題でした。そこで文理学部として積極的にお願いしようということで，世田谷区，板橋区等々に受け入れていただくことになりました。そのほかの連携も，色々とあります。成城警察や世田谷消防本署と松沢小学校等，それ以外にもいっぱいあります。

次に今日の本題の科学実験・文化フェアについてです。2002 年 7 月 26 日，ほぼ 20 年前になりますが，第 1 回の文理学部実験フェアを開催しました。当時は「理科離れ」という言葉が盛んに言われるようになり，各校で理科の実験教室が開かれ始めていました。

広報委員会でこの実験フェアを開催することになったきっかけとしては，実はオープンキャンパスでした。高校生相手のオープンキャンパスをやると，理学系の学科は，高校生に自分の学科を知ってもらうためにいろいろな模擬実験をやります。それで, どうせやるのなら, 高校生向けの模擬実験だけではなくて, もう少し簡単な実験もついでにやってしまおうということで，オープンキャンパスの前日に小学生・中学生相手にちょっとやってみませんか，ということで始まりました。恐らくこの地域連携学会の会長の落合先生が，初回を開催するに当たりだいぶご苦労され，世田谷区とも交渉していた記憶があります。1 回目は松沢小学校と松沢中学校にどうですかと，ぜひ先生方も参加していただきたいということで，やってみました。実験フェアですので，理学系の 6 学科，地球システム・数学・情報システム・物理学科・当時の応用物理学科・化学科が賛同しました。さらには，実験もするということで心理学科と，落合先生の地理学科も賛同していただき，全部で 15 ぐらいの実験をしました。元々は，小・中学生対象と謳っていたのですが，中学生はほとんど来ず，小学生ばかりでした。1 回目はアニメーションプログラムなど，結構高度な実験をいろいろと入れていたのですが，実際は低学年の子たちが集まったということです。

その後，世田谷区教育委員会の後援もいただき，対象を松沢小学校・松沢中学校だけではなく，世田谷区全域へとだんだんと広げていきました。コロナで中断するまでは，毎年開催しました。国文学科や中国語・中国文化学科，ドイツ文学科，体育学科等も参加していただいて，その結果，名前も「科学実験・文化フェア」という形でだいぶ大きくなりました。実験テーマも 20 から 30 ぐらいに増えました。結果，2010 年には参加者が 600 人程度でしたが，だんだんと多くなってきて，桜上水ガーデンズという大規模なマンションが桜上水にできたこともあり，2,000 人規模の参加者になりました。実は 2,000 人と言っても保護者も含めてです。大体子ども 1 人か 2 人に保護者 1 人が付いてきますので，生徒さんだけの数は減るのですが，それでも 1,000 人規模の大規模小学校が丸ごとやってくるというような感じでやっていました。

しかし,「こういったことをやって何になるのか。大学として意味がないのではないか。」という批判が，実は聞こえてくるのです。これが，最近議論に上っている，費用対効果がないということです。そこで，大学の新入生に対して実施している一般的なアンケートの中で,「科学実験・文化フェアを知っていますか？」というアンケートをとりました。最初は「参加したことがある」というのはほぼゼロだったのです。それがようやく 2018 年前後から,「参加したことがある」という学生が，毎年 10 人ぐらいは入学してくるようになりました。ということは，こういう地域貢献をしていることによって，少しは地元の生徒さんたちが進学してくれるようになったのではないかと思っています。

今は結構広い範囲から参加してくれています。これは地図なのですが，赤くピンを打ってあるところが，今年参加してくれた小学校の生徒さんが住んでいるところです。実はもっと遠いところからも来たりします。どうしてそのようなところから来るかというと，やはり，他者からの口コミで，集まってくれるようです。また，世田谷区の図書館にポスターを掲載させていただいていますが，そのポスターを見て来たとか，世田谷区が発行している「わくわくサマープラン」で，夏休みにこのようなところで実験をできますよという情報を見て来たという人たちが結構多いです。

ですので，広い範囲から参加者が来ていただけていると思います。その参加者たちのアンケートによると「かなり満足している」「来年もぜひ参加したい」というような意見が多いので，参加していただいた生徒さんも満足してくれているようで，嬉しい限りです。

さて，文理学部に一番近い松沢小学校との交流についてです。学校運営委員会が法令化される前に，松沢小学校ではそれに先駆けて学校運営委員会が設置されました。その委員長を歴代文理学部の教員が（歴代と言っても 2 人しかいないのですが）務めています。その関係で夏休みの「わくわく体験教室」や「避難所体験」などを私たち文理学部の教員と学生のボランティアグループである SSG（School Support Group）がお手伝いさせていただいています。松沢小学校とは古い付き合いで，15 年近く付き合っていますので，ここに書いてあるいろいろな実験をやらせていただきました。

さらに下高井戸商店街との連携ですが，大学が協力できる一つの取り組みとして「しもたかオープンキャンパス」というのを始めました。下高井戸で開催する大学教員の講演会です。第 1 回は 2019 年でした。第 2 回をやろうとしたところでコロナになってしまい，ずっとできずにいたのですが，ようやく今年第 2 回が開催されました。

最後です。8 月に日本大学が石川県と包括連携協定を結びました。が，実は日本大学本部には，こういう地域研究を推進する部署がないのです。すでに文理学部には連携推進委員会がありますので，そのノウハウを持って協力させていただいています。それ以外にも，文理学部の先生方は，個別に小・中・高等学校との教育連携を実施しています。本日多くの先生方がその成果をポスターで発表していますので，ぜひお聞きください。
以上です。ありがとうございました。

4. 日本大学文理学部社会福祉学科における実践（鴨澤）

これから発表をさせていただきます。日本大学文理学部社会福祉学科の鴨澤です。今まで，青山学院大学のコミュニティ人間科学部の状況，そして，日本大学の文理学部の状況ということで話が進んでいますが，私のところでは，社会福祉学科の教員が地域連携に関して何をしているかをご紹介できればと思い，発表させていただくことになりました。どうぞよろしくお願いします。

まず，私が所属しています社会福祉学科というのは，基本的には社会福祉士の国家資格を取ることが大きな目的になっています。そのためには，実習をしなくてはいけません。授業を続けながら 2 年生，3 年生の学生は，実習に行くだけでは手いっぱいなのです。

ところが，学生が 65 名ぐらいいる学科の中で，例年，三分の一ぐらいの学生が国家試験を受けない，実習をしないということが分かってきました。実際，実習に行かない学生が一般企業に就職等をする時に，社会福祉学科で学んだのに，全く実習に行った経験のないまま就職活動をしていくことで，実習に代わる経験が不足して困っているということが分かってきました。

そこで，2 年生では福祉社会フィールドワーク，そして 3 年生では産業福祉インターンシップという名称で，通年授業を開講し, 多くの地域との連携, 社会福祉関係の組織との連携, ボランティア活動の経験を積んでもらっています。そこで，まず今日は，2 年生の授業について事例の紹介をしようと思います。

名前は, 福祉社会フィールドワークです。実際に 2 年生 11 名が参加しています。社会福祉学科の学生が 11 名, そして, ドイツ文学科の学生が 1 名入っています。到達目標は，①ボランティアや社会貢献活動に必要な心構えやルールを理解できること，②福祉実践における活動，地域との交流活動に参加すること③イベントの企画・準備・実施を学外の方と協働で進めること，④世田谷福祉区民学会で発表することとなっています。

経済産業省が 2006 年に提唱して，今は「新・社会人基礎力」となっていますが，基本的に，次の「3 つの視点」の能力を伸ばそうと考えています。一つ目は，大学 4 年間で何を学ぶかということです。そして二つ目はどう学ぶか。ここはやはり，学内の授業だけではなく，学外の方たちとの交流から学ぶ。そして，三つ目はどう活躍するか。チームで働いたり，また，社会人の後を追って一緒に働いたりすることで，いろいろと学ぶ。社会貢献に向けて自分の人生設計を立てることを考えます。

実際に地域連携をさせていただいている組織の概要です。障害のある人たちとの交流を定期的にしようということで，NPO 法人と協働しています。この組織は，狛江市で 30 年以上活動していらっしゃいます。理念である，障害がある人，ない人が「共に」学び，育ち合うというのに共感して，一緒にいろいろな活動をしています。

もう一つは，世田谷区の子ども・若者部，子ども・若者支援課若者支援という担当者の方たちと，数年にわたっていろいろと連携しています。実際の活動の場は，若者の居場所上北沢「たからばこ」というところです。ここに，「岡さんのいえ TOMO」という地域の家があるのですが，日本大学文理学部の大学生が運営主体でここを始めたという経過があります。ただ，今はいろいろな大学の方がスタッフとして参加しています。

鴨澤小織氏

実際の活動については，NPO 法人のご紹介で，障害のある方 2 名と大学生が定期的に交流をするというプログラムです。学生が作ったこのプログラムのテーマは，大学と地域のつながりを，福祉制度を越えたよい形にするにはどうしたらいいかということです。この授業は実習に行かない学生が多いので，制度や政策などに縛られないで，もっと何かできないかということで，まずキャンパスツアーをしました。大学の中を，車椅子の方，また，障害が重くて歩くのがなかなか難しい方が，2 時間にわたってキャンパスを見学しました。その結果，学生がいろいろと気が付くことがありました。さらに，外に出て，障がいのある方と一緒に下高井戸を散歩するというような経験もしました。ここからも学生は多くを感じ，学んでいます。

また，福祉学科の学生は忙しいので，社会福祉学科の中だけで学生同士が交流している，という現実があることが分かりました。そこで，体育学科の吉田先生とゼミの話をしている中で，体育学科も障害のある方たちのスポーツや，特別支援学級など，いろいろなことが関連しているということに気付きました。そこで，体育学科の吉田ゼミが長年活動を一緒にしていらしたNPO法人とご一緒させていただき，福祉学科と体育学科で，障害のある方と楽しめるスポーツ大会を学生たちで企画しました。ここで，車椅子の方でもできる，紙で作ったチャンバラの刀のようなもので一緒に遊びました。社会福祉学科で車椅子や，高齢者になれるようないろいろなパッケージを所有しています。体を重くしたり，視野を狭くしたりというようなセットがあるので，それを学生たちは全部装備してスポーツ大会に参加して，障がいのある方と共に楽しみました。

また，地域の中高生･社会人と交流する，先ほどお話しした「たからばこ」は，世田谷区が今運営しているところで，中高生の居場所です。学校の帰りに中高生が来て，そこで学生が企画しゲームをしたり，何か食べ物を作ったり，いろいろなことをしています。そこで去年はいろいろと企画運営をしていたのですが，なかなかうまくいきませんでした。世田谷区さんからの申し出で，野毛青少年交流センターに泊まれるというお話を頂き，無料で泊まれるのでぜひ使わないかと学生に聞いたら，「行ってみたい」ということでしたので，この夏に 1 泊合宿をして，企画会議をしました。その結果今年の企画は好評でした。

学生の授業への参加目的等のアンケートをとってみました。学生がどうしてこういう授業を取りたいのかというと，一番多いのが「実習に行かない予定なので，いろいろな経験をしたい」，その次は，実習に行く学生も 2 名いるのですが，「実習に行くが，より広い経験をしたい」というものでした。そして，今までの経験，フィールドワークの経験でどのような力が付いたと思いますかという問いには，「一つの目標に向かってチームで動く経験から，段取りが見えた」，「ディスカッションで積極的に発言するようになった」，「イベント企画を考えることができるようになった」とのことでした。また，学外・学内の人との交流が深まったというところから，「自然な交流ができた」という声もありました。やはり，時間と場がないと，交流そして信頼関係が成り立たないということが分かりました。

また，「自由にチャレンジする場があって，失敗，うまくいかないことがある。だけど，それをきちんとカバーする仲間がいる」。「チームで一つのことをするやり方を学んだ。チームで協働しろと言ってもやり方が分からない。やった後にどういうふうに次に進めていくのか，育てていくのか，そういうことができなかったができるようになった。」「ディスカッションができるようになった」というアンケートの結果がありました。

そして，最後にせたがや区民福祉学会で発表をしました。この写真は去年の学生です。今年は今，PowerPoint を作って，今一生懸命準備をしているところです。学生が外で発表することによって，世田谷区の福祉の状況も分かる。そして，他大学の学生との交流もある。発表を聞く機会もある，ということです。

では最後に，地域連携から何を学んだのかということです。学生のアンケートによると，「授業だけでは見えない，

同級生のよいところをたくさん知ることができた」。これは，学内にいる時に自分の役割をつくってしまって，外に出ることで自由になるということがある。そして，「信頼関係がつくれた」「座学では得られないことを得た」「フィールドワークを通して，企画の立て方，ディスカッションの仕方を学んで，かなり自分が成長できたと思う」という意見がありました。

今後の課題です。大学と地域がよい関係を継続していくということが大切だとよく言われています。しかし実際には，教員の個人的なつながりで協働先を見つけたり，この教員が定年など辞めたりすることで繋がりが切れてしまうことがある。また，実習，サークル活動，国家試験の勉強，単位を取る忙しさの中で，地域と大学，行政，そして大学生自身の能力を高めていくプログラムをどうやって作っていくのか。この辺をこれからいろいろ検討する必要があると思います。実際には，学生は多くのことを学んでくれましたので，大学を出て，学んだことを生かしていく，そういう場がこれからも続いていくといいなと思っています。以上です。ありがとうございました。

藤平：ありがとうございました。ここまでのご発表は全て，大学における地域との連携です。最後は，高等学校における地域との連携の実践をご発表いただきます。よろしくお願いします。

5. 聖パウロ学園高等学校部活動における実践（阿部）

初めまして。聖パウロ学園高等学校の阿部といいます。大学の先生方の発表の後で大変恐縮ですが，部活動を紹介させていただきたいと思います。

まず，概要について説明させていただきます。この連携事業は，八王子市を基点に「多様な世代がつながるまちづくり」の実現に向け，ハンドベルの特徴を活かした演奏体験や共同演奏を，NPO や企業と連携して協働的に実施しています。

ハンドベルという楽器がなかなかなじみのない楽器ですので，少しこの楽器について説明をさせてください。この楽器は振るだけで音を鳴らすことができ，小さいお子さんから高齢の方まで，誰もが簡単に演奏することができます。また，一つのベルにつき一音が割り振られているため，さまざまな音階からなる楽曲を演奏しようとすると，何人かで担当を分け合いながら演奏する特徴があります。そのため，演奏者は自分勝手に鳴らすのではなく，楽曲のリズムに合わせてベルを鳴らすことで，きれいなメロディーを奏でることができます。ですが，いわゆる太鼓の達人のように，単にリズミカルに，ボタンを押すかのごとくベルを振ればいいかというとそうではなく，奏者それぞれは，上手下手といった技能や，不安や感情の揺らぎ，発想等が常に一定であるとは限りません。ですので，生徒たちには，お互いの「間合い」に意識を向け合いながら演奏するように指導しています。

そのような特徴を持つハンドベルというものを活かし，参加者同士で音楽をつくり上げる演奏体験，部員の演奏に一緒に加わってもらう共同演奏を，連携事業の内容として展開しました。

演奏体験では，奏者それぞれがベルを 1，2 本持ち，誰もが知っている童謡を題材として，リズム遊びや演奏練習を行い，最後に参加者全員で 1 曲を作り上げるという活動を行なっています。参加者には生徒がついて，ベルを鳴らすタイミングや鳴らし方をサポートしています。共同演奏では，演奏体験と同じ流れで練習を行った後に，参加者は自分自身でリズムを取りながら，付き添いの生徒とは異なるベルを持って演奏に加わります。参加者が持っているベルの音がなくなると，演奏の音が途切れてしまうので，演奏体験よりも緊張感や演奏した後のやりがいのある活動として，参加者の方々から好評をいただいています。こういった事業を去年の 11 月から現在において，各連携先の事業所や施設をお借りして，利用者の方々に向けてこのような日程で実施しています。

阿部滉氏

こうした連携事業は，昨年 10 月に八王子市の市民活動センターで行われた「中高校生によるアイディアコンテスト」や地域貢献プロジェクトに対して，企業や NPO 法人から賛同を頂いたことから始まっています。このプロジェクトでは，ハンドベル部がこれまで取り組んだ活動を，八王子市の現状や課題に沿って提案させていただきました。

これまで本校のハンドベル部は，外部演奏として八王子市にあるさまざまな施設で支援に取り組んでいて，奉仕演奏でのハンドベルの魅力について発信してきました。そうした特徴を題材としたクラウドファンディングを立ち上げ，多くの方から応援いただき，コンサートを開催することができました。

こうした活動の経験を経た現在の部員たちにとって，ハンドベルの活動はただ演奏を披露するのではなく，さまざまな人にハンドベルの魅力を実感してもらうことへと深まっていきました。また，ハンドベルの活動を応援し，演奏の場をくださる方々への感謝の気持ち，活動を支援してくださる保護者や地域住民とのつながり，また，演奏会に足を運んでくださる人たちとのつながりを大切にしていこうという思いが深まっていきました。

そうした中で，当該コンテストへの参加を生徒たちに提案したところ，これまでの活動が，どのように地域に貢献できるのかということを再定義するきっかけとなりました。ハンドベルを介して，地域住民とつながることができた経験が，地域づくりに貢献できるのではないかという考えに発展し，「ハンドベルによる多様な世代がつながるまちづくり」と題した地域貢献プロジェクトが立案されました。こうした思いは，本事業以前に演奏させていただいた施設からも賛同いただくことがあって，現在の活動になっています。

本事業の成果について報告させていただきます。本事業は，地域・社会活動の一環として展開しましたので，社会教育における人づくり・つながりづくり・地域づくりといった観点から，本事業の目的に即した象徴的な事例を紹介させていただき，解釈について説明させていただきます。

文字が多くて申し訳ないのですが，まず，事例 1 についてです。介護施設での演奏体験において，体験に興味はあるのだけれども自信がなく，参加を決めかねていた A さんが，施設の方から促し掛けがあり，体験に参加することになりました。このやりとりを見ていた生徒 B がサポートに付くことになりました。生徒は普段，体育の授業でほかの生徒に教える気持ちが強くなり過ぎて，逆に空回りしてしまう部分があり，ちょっと心配をしていました。しかし，A さんに対してはハンドベルを教えるという気持ちよりも，不安な気持ちに寄り添いながらベルを鳴らすタイミングを導いていこうという気持ちが見えました。そうした生徒 B の関わりに対して A さんは,「これでいいのかしら」とずっと生徒 B の顔をうかがいながらも，堂々とベルを振る姿が見られました。演奏体験終了後，A さんからは「またやってみたい」という気持ちを聞くことができました。

こうした事例 1 で，参加者と生徒の姿から，「教える・教えられる」という関係ではなく，共に演奏を作り上げる他者として，同じ目線に立ち，気持ちに寄り添い合う「2 人称的な関わり」を見ることができました。こうした他者への関わり方は，校内で見せる姿とは異なり，活動を通じた人間としての成長と人づくりへの貢献を感じさせるとともに，他者との共同的活動に参加するために，従来おろそかになっている「2 人称的な関わり」の重要性を再認識するきっかけになりました。

次に，事例 2 について紹介させていただきます。学童保育所で実施した共同演奏の練習中に，「やりたくない」とすねる児童 C に対して，同じグループの児童 D からは「そのような子は放っておこう」という発言が見られました。その児童 D は, 自分のパートの練習に熱中していて, 児童 C には見向きもしませんでした。児童 C のサポートに当たった生徒は，ベルを鳴らす難しさに共感を示したり，鳴らすタイミングを伝えたり，少しでも演奏に参加できた時には賞賛の声を掛けたりという関わりをしていました。そのような生徒の姿を見て，児童 D から次第に児童 C への歩み寄りが生まれ，共同演奏の発表の時には，児童 D が児童 C の譜面を見てタイミングを掛け合っているという様子が見られました。

こういった事例を通して，生徒を介して児童同士がお互いの音への意識を向け合うことで，演奏における互いの存在が意味を帯びていく様相を垣間見ることができました。こうした相互行為では，田中 (2022) が述べているように，最初は単に匿名の「ひと」であった他者が「誰か」として際立つという，主体的な他者理解というものが生まれてきたと解釈します。事例 2 では，演奏するという行為が参加者同士の「つながりづくり」に寄与することができました。

コーディネーター　藤平敦氏

本事業における事業の解釈から得たつながりづくりの成果は，それぞれにとって大きな意義を有するものであ

るとともに，つながっていく意義を持つものだと考えています。また，社会教育における「学びと活動の好循環」として蓄積されるものであると考えています。

最後に，課題についてです。本事業では，本校と連携先の間の個別の活動にとどまっていたため，連携団体の中でのコミュニケーションの形成には貢献しつつも，各連携先を横断するコミュニケーションには至っておらず，限定的な地域づくりにとどまっているという課題があります。そのため，福祉施設や介護施設，アウトリーチが必要な連携先への個別の事業を行いつつも，商業施設や市民センターなどの，多様な地域住民が集う場所を活用した共同事業への発展を模索していく必要があると考えています。ありがとうございました。

6. 全体協議

藤平：4 名のご発表者の方，ありがとうございました。この後は全体協議に入っていきますが，時間が 20 分しかありません。冒頭申しましたように，一人一人の発表の内容についてのご質問は，この後のポスターセッションでお聞きください。

落合会長から最初に，本大会から大学地域連携学の在り方について考えるための「何か」を探す時間にしてほしい，というお話がありました。その問い掛けに対し，ここでは全体として，このようなやり方で進めたいと思います。 漢字一文字で，4 名の内容の共通点を出していただき，そこから落合会長の問い掛けである，大学地域連携学の在り方は「何か」ということを模索していければと思います。

発表者の方だけが考えるのではなくフロアの方も一緒に，漢字一文字で，4 名の方の発表の共通点というのは何かということを，もう一度プログラムの中身も踏まえて，説明のところも見て，それぞれ考えてみませんか。これは正解がありません。特に大学地域連携というのはそれぞれ多様ですので，出てきた言葉についてのお考えもお伺いする時間にできればと思います。フロアの方も一緒によろしくお願いします。では，一文字を書くためにホワイトボードを用意しましたので，これに書いて，後で一斉に開けたいと思いますのでよろしくお願いします。

田原「地」
藤森「繋」
鴨澤「育」
阿部「体」

藤平：それでは，この後では発表順で，田原さまからこの漢字を書いた説明をしていただきたいと思います。一人 3 分でよろしくお願いします。

田原：漢字 1 文字を書くとなると，清水寺の和尚の気持ちがわかったような気がします。（会場に出席している）私のスーパースターである澤野大地さんの名前にもある「地」でもあるのですが，「地」域連携なのですよね。同じような言葉で，産学連携などさまざまあると思います。産学連携の場合は，大学のリソースは恐らく研究者か研究施設。地域連携の場合は，人，特に学生が主体になっていきます。つまり，地域も人の集まりです。「地」というのは人が集まる場所を指していると言われています。

ですので，先生方の発表を聴いて，人と人とが繋がっていくということが地域連携にとっても重要だと思いました。特に大学地域連携の場合は，学生と地域の人々が集まっていくような場所が大学の中というよりも，大学の外にあるべきだと思います。ですので，「地」と書かせていただきました。よろしいでしょうか。

藤平：どうもありがとうございました。「地」という字ですね。大学のみならず人が集まる場所，そこをつくっていくということが大事だということですね。ありがとうございました。では引き続きまして，藤森さま，お願いします。

藤森：漢字 1 文字は難しいのですが…「繋ぐ」です。今，田原先生からも繋ぐという言葉がありました。文理学部の学生たちは，大学で暮らしているわけではないのです。授業に来ているだけなのです。でも，やはり毎日利用するのは下高井戸の駅や桜上水の駅です。

文理学部の学生が科学実験・文化フェアに参加して，スライムを作りました。数日後松沢小学校の「わくわく体験教室」で今度は人工イクラを作りました。 続けざまに 2 週間の間に小学生と会う機会がありました。そうしますと，小学生は記憶力がいいので，下高井戸商店街で「あ，理科のお兄ちゃんだ」というように声を掛けられるのです。そうするとやはり「ああ，いいことをしているなぁ」という気が何となくいたします。普通ですと，下高井戸・桜上水を通っていても，声一つ交わさないはずだった小学生たちと，一緒に話す機会ができるというのは，やはりいいことだなぁという気がします。

先ほど，大学では，実は科学実験・文化フェアは広報委員会が担当していると言いました。そこで言われるのは費用対効果です。「これほどお金をかけて，このぐらいしか学生が来ないのなら，費用対効果が低いから，やる必要はないよね」というような議論が出てくるわけです。でも，そういうものではなくて，地域で生きているのだから地域の人たちと一緒に繋がっていきたいという気持ちは，やはり持っていたほうがいいと思います。文理学部は教員を目指す学生が多いので，その子たちはそこで実践的な学びも得られます。ですので，やはりこういう地域連携の機会は必要な気がしています。

藤平：ありがとうございました。「繋ぐ」という字です。それでは引き続きまして，鴨澤様，よろしくお願いします。

鴨澤：私は，「育てる」という字を書きました。もちろん大学ですので学生を育てていくことが教員の大きな責任となりますが，大学と地域との連携で育てられるのは，例えば教員である私も，多くの学外の地域の人々に育ててられて今があります。また地域と繋がることで，今の社会問題が見えて，そこで人が育てられる。
また，私と学生が現場に行くことで，現場の方たちも新しい風を入れることで自分たちも育つというお言葉を頂きました。世代間の交流，またバックグラウンドの違う人たちの交流，いろいろなことを経験しながら，人として体験を通して育っていく。そして，心を通わせる。発達理論では，幾つになっても人は育っていくそうです。その過程に大学や地域がいるといいなということで，これを選びました。

藤平：ありがとうございました。では最後に，阿部さま，よろしくお願いします。

阿部：本当は身体と書きたかったのですが，1 文字限定でしたので，「体」という字を書かせていただきました。私も保健体育科の教員であるとともに，体の大事さというものは常日頃から感じております。また，登壇された先生方の発表内容との共通点である連携においては，フィジカルでのつながり，身体を通じた人とのつながりが社会において大事なのではないかと思ってこの言葉を選びました。

藤平：ありがとうございました。予定では，4 名の方の文字を踏まえて，その共通点は何かというのを出してまとめにしようかと思ったのですが，全部ばらばらで，おふたりぐらい同じものが出てくるのかなと想定していたのですけども，最初想定していたところは，鴨澤さまが出した「育てる」，「育」が複数出るのかなと思ったんですね。でも，本当にさまざまでした。「地」，場所，あと「繋がる」ですね。あと，フィジカルの「体」ということでした。それぞれ納得がいくものです。

では，大学地域連携学会ということで大学と地域の在り方，たくさんの考え方があります。何か答えを出すということではなくて，人材育成をする際に，ただ単に大学や高校の生徒や学生が学ぶだけでなく，どちらかというと貢献という，恩返しすることが貢献になったら，そのための場としての大学と地域がある。こういう形でまとめさせていただきたいと思います。

これが合っている，合っていないは，いろいろな考えがあります。それぞれが，何のために連携するのか，それぞれの相手のことを思いやり，周りに目配りしつつ，そういうような心を育むことが結果的に，連携の活動を

全体協議

推し進めるということでまとめさせていただきます。

本日はご発表者の方も，本当に短い時間でしたがありがとうございました。また，フロアの方も本当にありがとうございました。この後ポスターセッションがありますので, そちらで細かくお訪ねください。それでは, これでポスターシンポジウムを終わりたいと思います。どうもありがとうございました。